



JIM-NET会議に参加した医師ほか各関係者

NEWS

特集：第12回JIM-NET会議報告

1.医師からの報告..... P.1～3

2.事務局長からのメッセージ..... P.3

事務局長中東レポート

空高く舞い上がり イラク航空.... P.4～5

絆ぐるぐるプロジェクトのご報告.... P.6

福島プロジェクト報告..... P.7

鎌田代表のつぶやき..... P.8上

「イラク 白血病と闘う子どもたち」
絵画展が開催されました！..... P.8下

第12回 JIM-NET会議報告

2013年2月21日-22日、アルビルの Chwar Chra HotelでJIM-NET会議が開催されました。今回で12回目を迎えるこの会議には、バグダッド、モスル、ドホーク、カラクーシュ、アルビル各地からイラクの医師総勢14名が参加。各地の小児がん・白血病の現状や治療について報告が行われ、それぞれの病院が抱える問題点や課題などについて積極的な意見交換がなされました。

今回の会議の様子について、これまでの会議の経緯や将来の展望を交えながら、佐藤真紀事務局長とともに2004年8月の初回よりJIM-NET会議を企画・実行してきた井下医師が語ります。

●JIM-NET会議の変遷

JIM-NETは、支援の受け手であるイラクの小児がん専門医たちと定期的に会議を行っている。発足時から継続している”JIM-NET会議”と呼んでいるその会合は、今年の2月で12回を数えた。

当初のJIM-NET会議は日本とイラク医師たちとの連絡会議のようなものであった。イラク医師らのニーズを聴取し、その物資を直接彼らの手に届け、次の会議で支援を逐次評価し修正していくものであった。このような連絡会議は、混乱を極めた戦争直後はイラク医師にとってもJIM-NETにとっても重要であったのだが、治安が安定しイラク国内のマーケットが充実してきた2007年ごろからは様相が変わってきた。イラク国内で多くの薬剤が調達可能となり、単なる連絡会議であればメールで事足りる。学術的向上心とプライドが高くかつ多忙であるイラク人医師たちは、「何が必要ですか？役に立ちましたか？」と聞くだけの会議

に興味を失いつつあった。実際、イラク人医師の会議参加者が少なくなった時期があった。JIM-NET支援の窓口である彼らとの関係が希薄になれば、JIM-NETの活動そのものに支障をきたす。JIM-NET存続の危機である。

このため彼らをJIM-NET会議につなぎおくために、2007年ごろから学術会議を加えた。幸運なことに信州大学の小児科教室の協力を得ることができ、今ではイラク人医師たちの医学的興味を満足させる”イラク小児がん学会”とよべるくらいの会議となっている。

(過去のJIM-NET会議の様子については、近日中に、JIM-NETのHPに掲載予定です)



井下俊 (JIM-NET医師)

●JIM-NET会議の意義

ここ数年のJIM-NET会議では、毎年新規の小児急性リンパ性白血病（ALL）の治療成績を、各センターごとに発表してもらっている。症例を蓄積し自分たちで解析することで、自身の治療成績を客観的に認識できる。そのデータをイラク各地から持ち寄り発表することで、自分たちが世界のどのレベルにあるのか、治療成績は向上しているのかを毎年確認できる。初步的な解析であるのだが、政情不安定な中で長らく学術的な活動から遠のいていたイラク人医師たちにとって、JIM-NET会議は重要なイベントとなった。

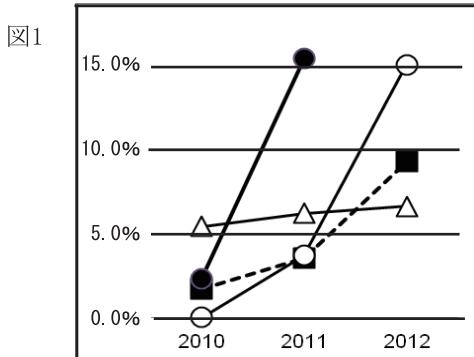
イラクでは治療開始間もなく亡くなったり治療から脱落する症例が多い。日本では1%程度である治療開始後1か月以内での死亡率は、2006年のデータでは13%を超えていた。そればかりでなく、主に経済的理由から治療を早々とあきらめ家に連れて帰る症例も10%程度みられていた。よって、イラク小児がん治療の向上を目指に掲げるJIM-NETにとって、ALL治療早期（1か月目）の成績が活動評価の指標となる。

JIM-NET会議は、イラク医師たちが提示したデータから、その達成状況を確認できる貴重な機会である。

●治療早期の成績比較

さて、本年2月のJIM-NET会議での最新データである。JIM-NET支援の効果を評価するのに有用な3つの項目の、ここ3年間の年次推移を示した。なお今回バスラからはデータが得られなかった。

1) 治療拒否症例率（治療拒否/ALL診断症例）



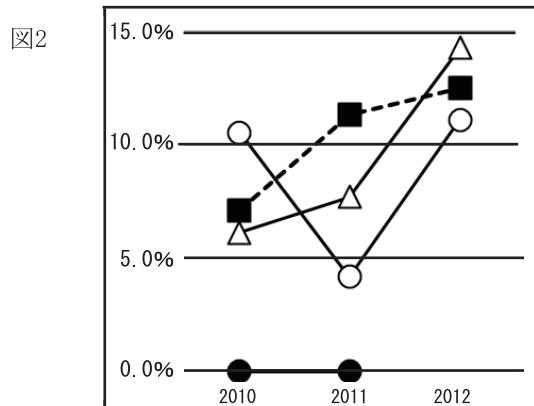
- ▲ CCHT; 子供中央教育病院（バグダッド）
- CWTH ; 子供福祉教育病院（バグダッド）
- BCSH ; バスラ子供専門病院
- Nanakaly; ナナカリ病院（アルビル）

上記表示は図2および図3にて同じ

治療拒否症例は日本では考えられないケースである。ALLと診断されたものの、主には経済的理由から治療はせずに、そのまま帰宅する症例である。2010年には4つのセンターの平均は2.5%（239例中6例）であったのが、2012年には3つのセンターの平均で9.5%（200例中19例）まで増加している。

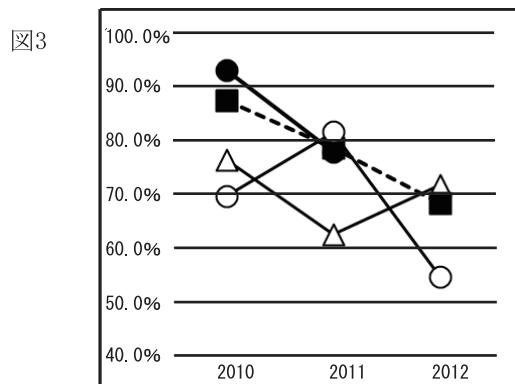
2) 治療開始1か月以内の死亡率

（死亡症例/治療開始ALL症例）



治療開始1か月以内での死亡率は日本では1%未満である。死亡例を救うには感染症対策や輸血などの支持療法が重要であり、JIM-NETの活動の効果を見極めるためのマーカーが早期死亡率である。残念ながら、2010年には5.8%（223例中13例）あったのが、2012年には12.8%（179例中23例）まで悪化している。

3) 初回寛解導入成功率(寛解達成症例/ALL診断症例)



ALLと診断された症例から、1)の治療拒否例と2)の治療早期の死亡例、および治療開始後の治療拒否例、化学療法無効例を差し引いたのが初回寛解導入成功例である。再発がなければ完全治癒が期待できる症例であり、その達成率から治療レベルを推し量ができる。残念ながらこの項目も、2010年には84.1%（239例中201例）あったのが、2012年には67.0%（200例中134例）まで悪化している。

●治療成績悪化の原因

残念ながら2010年から2012年にかけて治療成績は悪化しており、治安状況の悪さから最悪の治療成績であった2006年のものに匹敵する。イラク人医師たちが治療成績悪化の原因として訴えていたのは、相対的な患者数の多さである。治安状況の改善とともに一病院が扱う患者数は増加の一途である。にもかかわらず病院の拡張はなく、看護師や専門医の数の拡充も十分ではない。よって一人の患者に割くことができる時間と設備は以前より悪くなっているとのことであった。加えて、政府の方針により感染予防に重要な役割を果たす掃除婦さえ確保できない状況にあり、感染予防の重要性を認識できても実行できず、治療環境は最悪の状態のことであった。

言い訳かもしれないが、がんの治療である。一市民団体の支援で、そうやすやすと改善できるものではない。我々の行っている感染予防活動の支援や抗がん剤・抗生物質の援助は微々たるものである。イラク政府も巻き込んだ国家的取組なしでは目標達成は困難というのが正直な思いである。今後は、JIM-NET会議に参加しているイラクの小児がん専門医たちの声をイラク政府に届け、小児がん治療環境の整備が政府主体でなされることを後押しする必要がある。

●JIM-NETの活動意義

イラク戦争から10年がたった。JIM-NETは2004年に活動をはじめたから、今年度の活動が十年目というこ

とになる。区切りの年であるから、はたしてJIM-NETの活動はイラクの人たちに益をもたらしたのか？意味のある活動ができているのか？活動にかかわっている我々日本人の自己満足に終わっていないか？継続する価値のある活動なのか？、そういったことを厳しく検証しなければならない。

残念ながら、今回のJIM-NET会議で示されたALLの治療早期の成績の結果からは、有効な支援ができるいないという評価になる。10年経っても成果が出ず目標達成ができないのであれば、それは無駄な活動であり撤退すべきという声がでるかもしれない。より有効な支援活動を設定しなければならないのは言うまでもないが、はたして目標達成ができないJIM-NETの活動は無意味であろうか？

最近感じる。イラク戦争は忘れ去られようとしている。イラク戦争の大義はでっち上げだった。偽りの正義の戦いで劣化ウラン（DU）がばら撒かれた。そのDUにより小児がん患者が増えているといわれる。その戦争を日本は支持した。しかし日本政府は真剣にはイラク戦争を検証していない。時間が経過し少しづつでも状況が安定していくべき結果オーライ、とはいえない。忘れてはならない。目を閉ざしてはならない。過去を見つめず明日を語るのは空虚である。イラクを忘れず見つめ続けるためには、たとえ目標達成が不十分でも活動を続けなければならない。それがJIM-NET活動の意義だと思う。

JIM-NET会議で感じたこと

佐藤真紀（JIM-NET事務局長）

震災から2年あまり。日本は復興したのだろうか？日本は最近内向きになっている。多くの人々は経済成長にしか興味が無くなってしまった。しかし日本人の行動規範であるべき憲法には以下のような一文がある。「われらは、平和を維持し、専制と隸従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」

我々はあらためてイラクに目を向け、がんの子どもたちの支援を続ける。「まずはこの会議を成功させたい」。

しかしながら今回の会議にバスマからの参加者はなかった。バグダッドの医師からもデーターがそろわない。しかも治療成績はここにきて悪くなっている。

井下は医師たちに質問を投げかけた。「イラクの医師たちが忙しいのは理解できる。さらにこのような会議で負荷を増やしてしまう。この会議そのものをやる意味はあるのだろうか？みんなで考えてほしい」

するとマーゼン医師は、「会議は刺激的です。いつ

も情報がほしい。孤立させないでほしい。イノシタの協力はいつでも必要とされている」と言った。またペイマン医師は「感染症対策をJIM-NETに支援してもらっているが成果がないことを恥ずかしく思う。私たちは指摘された問題点を改善しようと一生懸命だ。これからもこういう場での指導を続けてほしい」と言い、サルマ医師は「イラク人が集まりこうしてテーブルを囲み話し合うことは貴重な機会。JIM-NETがなければこのような機会は持てなかつた。これからも、JIM-NET会議でこういう機会を作つてほしい」と言った。イラク人医師たちの話を聞き、井下医師のやってきたことの大きさがあらためてわかる。医師たちの信頼を培ってきた地道な活動こそが称賛されるべきものだと改めて感じることができた。



JIM-NET会議冒頭で挨拶する佐藤事務局長

空高く舞い上がれ。イラク航空。

佐藤真紀（JIM-NET事務局長）

イラク戦争から10年経つ。しかし、シリア内戦の影響もあり、イラクでも宗派対立の兆しが強まり治安が悪化しているのでバグダッド入りを見合わせていた。今回も地方議会選挙があり、先にアルビルに入りし、様子を見ながら、バグダッドを目指す。4月20日の選挙が終わった翌日のイラク航空のチケットが取れた。



イラク航空はツバメのロゴマーク。サービスは最悪だが、応援したくなる。数日前に飛行場の駐車場で爆弾テロがあり、黒こげになった車が数台転がっているのが見えた。臨時の検問所も増えて兵士たちには、緊張感が漂う。車で走るとジャドリーヤという繁華街が見えた。夜でも煌々と明かりがともり、道路には花の電飾が並び、まるでクリスマスのようだ。ショッピングを楽しむ人たちもいる。半年で結構変わったなと思っていると、宿泊するホテルの周りは相変わらずのゴーストタウンになっている。

取材でバグダッドに滞在中のアジアプレスの綿井健陽さんと同じホテルだった。のちに映画「リトルバーズ」としてそれらの映像をまとめた。

僕たちは、夜になると、ホテルの隣にあるバーにいった。サドーン通りには、酒屋とバーが結構開いている。バーは、メディアセンターというような名前がついていて、表からはわかりにくい。外国のジャーナリストがよくたむろしていたのだろう。少し前なら、イスラム原理主義から襲撃されたであろうが、最近はイスラム教徒のおやじ達も、結構飲みに来ているようだ。

僕たちは、昼間見たり聞いたりしたことをシェアして分析してみた。時には10年前の思い出話から、今はこんな風になっているとか。

ホテルの屋上にのぼれば、パレスチナホテルとサダメフセインの銅像が引き倒されたフィルドス広場が見える。そして、チグ里斯川の向こう岸にはかつてのサダメ宮殿。

「ブッシュ大統領の期限が過ぎ、戦争がはじまらないのかなと、うとうとしてたら、空襲警報のサイレンが鳴り、トマホークミサイルが飛んできた。あのあたりですよ。」

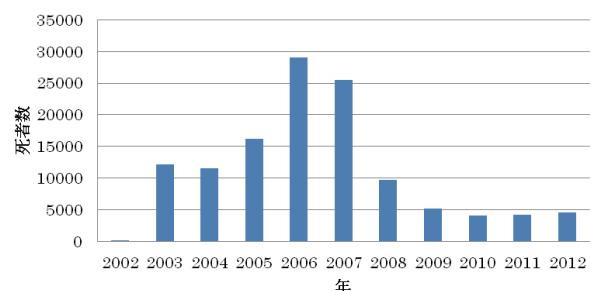
綿井さんは、バグダッド陥落の瞬間に、現場から「哀しい制圧です」と興奮気味にレポートした。あれから10年たつが昨日のことのように生々しい。

「直接アメリカ軍の攻撃で死んだ人もいるし、宗派対立で死んだ人もいる。一国の首都がああいう風に外国の軍隊に制圧され、その後を見たら、やっぱり哀しい制圧だったんだなと。」

サダメ・フセイン像があったところには、「自由と希望」という像が建てられたが、一年前にそれはなくなっていた。これから何がそこに建てられるのだろう。

綿井さんは、今回「リトルバーズ2（仮題）」を制作するために10年前取材した人に再会した。「最初に思ったことと全く違うことが10年間で起きた。アメリカが来た時に自由を獲得したと思った人も、絶望したり、また、やっぱりアメリカ軍がいたほうがよかったと今になって思う人もいる。一概には言えないけど、日々の生活にかなり疲れていても、希望を失わずに生きているという感じです。」 映画の完成が楽しみだ。

民間人の死者数の推移



●バスラに行く

バグダッド入りしてから治安がどんどん悪くなってきた。後日、4月の死者は700人を超える。この5年で最悪になったという発表がなされた。治安が少しはましにバスラまで飛ぶ。

バスラに着いて、予約確認のために事務所に行くと、バウチャーのカーボンがないという。バグダッドの飛行場で、職員が間違えて帰りのバウチャーを切ってしまったらしい。女性のマネージャーは、「あなたの持っているバウチャーは、行きのものです。バスラから、アルビルに戻りたいのなら、その分のチケット代を払いなさい」というのだ。

「あなたがたのミスなんだからそっちで責任取ってください」というと、「私の責任だって？チケットを間違って切ったのは、バグダッドの職員だわ。私の責任ではないわ」と逆切れされる。「あんたら、同じ会社でしょう。」「私の責任ではない」の一点張り、「どうしてちゃんとチェックしなかったの？」「じゃあ、おれの責任か？Eチケットの時代にそんなもんいちいちチェックするのが客の仕事か！こんな詐欺でしょう？警察に言ってやる」

すると女性は、「日本人が警察を呼ぶって騒いでるわ。

警察なんて役に立たないのに」と笑っていた。確かに、役に立たないかもしれない。結局話はつかず、翌日に。今度はあっさりと、「チケットをご用意しておきました」という。後でわかったことだが、昨晩、この女性に、警察のお偉いさんから電話が入ったらしい。「日本人の前で警察が役に立たないと侮辱しましたね？」その一言が効いたようだ。これこそが今のイラクなのだ。

バスラはシーア派が大半を占める。ニュースを見れば、少数のスンニ派が虐げられ、シーア派は、優遇されているように思われるかもしれない。

しかし、バスラに広がるシーア派の貧困街は半端ではない。今回小児がんの患者の家族を何軒か訪問した。下水が池のようにたまつており蚊が大量発生している。

リンパ腫で苦しむ14歳のヌールさんの家の敷地にも下水が流れ込みハエが大量に発生。数百匹は飛んでいる。父親を一か月間にがんで亡くし、すっかりふさぎ込んだ彼女は病院にも来なくなったという。お金で渡して病院に来るようになると諭す。数日後、病院でイブラヒムが撮った写真が送られてきた。腹水でおなかがパンパンに張っている。

サジダさん17歳は、JIM-NETの支援でイランで放射線治療を受けているが、2003年の米軍の攻撃の際、銃撃戦に巻き込まれ父親を亡くした。母は、ゴミ拾いで生計を立てている。いわゆるスカベンジャーだ。山積みになったゴミをすべて売っても100ドルほどにしかならないという。サジダは、学校に行ってないので



自分の名前も書けない。特に女子は学校に行かない子も多い。イブラヒムが病院で行っているクラスで初めて文字を学ぶ子もいる。こういった居住区は、一般的なイラク人も行きたがらない。地元のギャングやイスラムの武装勢力が入り込んでいるかもしれないと思われている。誘拐して身代金をとられるかもしれないからだ。

僕が滞在しているときにも、ローカルスタッフのイブラヒムの親戚がのっている車がおそれ、運転手が射殺されるという事故が起きている。援助関係者や政府の福祉関係職員も寄り付かないし、難民というわけでもないから誰も注目しないで、ほっとかれている。

最後に、サブリーンの家を訪ねた。サブリーンは、享年15歳で亡くなった。もう4年経つ。母親は、「私には4人の子どもがいるのに、サブリーンのことを忘れることができない」と涙を流していた。

僕たちの10年。救えなかった命もたくさんある。まだまだ幕引きにはできないのだ。



一か月前に父をがんで失い元気のないヌール



サジダのおかあさんと弟がごみを集めて生計を立てている



絆ぐるぐるプロジェクトのご報告

榎本彰子 (JIM-NET 海外プロジェクト担当)

未だ混乱が続くシリアから、現在までに150万人以上の人々が、近隣諸国へ逃れて来ています(UNHCR, 2013.5.16)。JIM-NETでは、イラクとヨルダンに避難しているシリア難民の支援を実施しています。今回は、その中の「絆ぐるぐるプロジェクト」について、報告させていただきます。

「絆ぐるぐるプロジェクト」とは、東日本大震災後に東北支援のために集まった「絆」を、次に支援を必要としている人々に届け、地球上でぐるぐると回していく、という事をコンセプトにした活動です。この度、これまで石巻での活動を通じて知り合った地元の漁師さんから、「震災後に届けられた支援物資の衣類が漁具倉庫に残っているので、シリア難民に届けられないか」と、お声掛けしていただきました。それをきっかけに、震災後に石巻に届けられ残っている衣類を、シリア難民に届ける活動が始まりました。

今年2月に石巻を訪れ、漁師さんの漁具倉庫に残っている衣類を見せていただきました。倉庫には、衣類の入った段ボールが数多く積まれていました。古着と新品や様々な種類の衣類が混在していたため、シリア難民に届けられる衣類の仕分けを行いました。また、現在でも漁師さんの元に足しげくボランティアさんが通われており、震災から2年がたちましたが、絆が続いていることを実感しました。

これまでに、JIM-NETやサダーカ(ヨルダンでのシリア難民支援を協働で実施している団体)のスタッフ・関係者が現地に渡航する際に、手持ちで衣類を持って行き、シリア難民に配布してきました。特に、2月のJIM-NET会議で渡航した関係者は、現地でもまだ寒い季節だったので、冬服や防寒具を届きました。また、輸送費を賄うため募金の呼びかけをしたところ、1カ月で約42万円のご寄付をいただき、大量の衣類を石巻からヨルダンやイラクに直接輸送することが可能になりました。石巻の衣類が保管されている場所に再訪問すると、みかん箱が大量に置かれていました。石巻の市場の方が、「衣類を運ぶなら二重の強い段ボールの方がよい。震災後に届けられた衣類の梱包の中には、薄い段ボールのため途中で壊れ、そこから湿気が入りカビが生えたものもあった。」と運搬に気をかけてくださいり、丈夫な箱を集めてくれていました。石巻の人が今度はシリア難民のためにと、これまで日本全国や世界から集められた「絆」を、次の避難者のためにと行動している姿を見ると、世界中で「絆」がぐるぐる回っているのを感じました。

5月初旬、シリア難民支援プロジェクトの活動のため、ヨルダン・イラクへ出張してきました。ヨルダンでは、アーキラ病院(JIM-NETが出産費用を支援)を利用した出産後の産婦さんの家庭を訪問し、その後の赤ちゃんの成長を診たり、病院での出産時のお話を聞いたりしました。それと同時に、産まれた赤ちゃんやその家庭にいる子どもたちに、石巻の衣類を届けました。



産まれた赤ちゃんに衣類を届けた様子

多くの都市難民は、アパートの一室で2・3家族と一緒に住んでおり、子どもは5~10人いました。子どもたちは、新品の袋を破り衣類を手にすると、笑顔を見せてくれました。試着してみた後、丁寧に服を畳んでいる子もいて、大事そうにしてくれているのが、嬉しかったです。



写真左：

石巻から運んだ衣類を
高田馬場のJIM-NET
事務所でシリアに向け
運び出す準備

すなば
えい



写真右：

届けられた洋服をあ
ててみて、はにかむ
シリア難民の女の子

これまでにイラク・ヨルダンへ届けた服の総量は、手持ちで約120キロ、輸送で110キロとなりました。今後も、まだ石巻に残っている衣類を届けていく予定です。内戦が続き近隣諸国での長期化する難民生活や新たにうまれた難民の生活をサポートするため、これからも絆をぐるぐると繋げていけるような活動をしていきたいと思います。



福島プロジェクト報告

中山薰 (JIM-NET福島プロジェクト担当)

福島に帰るといつも驚かされるのは、すぐそこに聳える山並を背景とした四季折々の花の美しさです。そして今は、田植え後の緑が一面に拡がり彩りを添えました。野菜の直売所には、ぴちぴちの真っ赤なトマトが輝いています。

JIM-NET福島から初めて。4月から福島のプロジェクトに加わらせていただきました。これまでには、国際保健や環境教育のNGOの事務局おりました。プロジェクトを始めるにあたり、県内を廻りながら、JIM-NETの活動と福島の、この2年余りの振り返りをしております。大きく変わってしまったこと、日々状況変化する速さとともに反面、全くと言っていいほど変わらない現状に対する思いもあることでしょう。これからはJIM-NET福島を小さな発信基地として、ほっとけない様々な情報を皆さまに届けていけたらと考えています。

鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴鶴

プロジェクトの幾つかを紹介します。はじめは、「食品農産物・市民放射能測定所便覧」作成頒布企画、そして、福島発の情報とメッセージの発信、もう1つは、子どもたちのための「放射能の見える化」プロジェクトです。

最近、都内のスーパーマーケットの店頭で福島県産の野菜を見かけて嬉しくなりました。農家と大学や研究機関が協力して行った調査により、農産物の多くは移行係数が低いことが分かり、市場に出ている米や野菜のほとんどが検出下限値以下とのことです。米は全量全袋検査をして出荷する安心感もあり、除染改良した農地で作付けを再開された農家さんも増えたようです。発災から2年余り、これまでの生産者の皆さんのご苦労は想像を絶するものだったと思います。

然しながら、耕作を断念される農家さんもいて耕作放棄地が拡がっていると聞きます。基準値を上回る放射性物質が検出されることを危惧してのみではなく、出荷しても福島県産の農産物の買付価格は非常に低いという現実があります。信頼できる農家さんの美味しい野菜を、もちろん検査して、顔の見える直販方法で独自に販路を拡げるなど、新しい流通のかたちを模索している方たちもいます。「福島の農家は苦難のなか農地と農産物への影響と対策を続け、「知ることは生きること」の思いで営農してきました」(福島県有機農業ネットワーク)。原発事故発災後、公的な食品放射能測定所ができる前から、真っ先に測定器を導入して、食品・農産物および土壌の検査を自ら行ない、食の安全と、子どもたちを内部被曝から守る活動に取り組んでこられた、市民放射能測定所の皆さん。そのご苦労と功績を便覧としてまとめ、福島県内への頒布はもちろん、県外へもイベントなどを通して紹介してい

きたいと考えています。



2013年3月に下北沢に開店した福島と東京をつなぐ

福島県有機農業ネットワークの直営店

放射能測定結果「検出せず」

「福島原発事故はまだ終わっていない。被災された方々の将来もまだ見えない」(国会事故調報告書より)

この国会事故調査委員会は、公正で中立的な立場で事故原因究明のための調査・提言を行うために設置された独立調査機関で、2012年7月5日にその報告書を衆参両院議長へ提出しました。しかし、1年近く経ってもいまだに、この提言の実践に向けた取り組みは始まっていません。「被災地の住民にとって事故の状況は続いている。放射線被ばくによる健康問題、家族、生活基盤の崩壊、そして広大な土地の環境汚染問題は深刻である」

国会事故調が示唆する7つの提言の実現を目指すことは、福島原子力発電所事故によって日本が失った、世界からの信用と、国民の信頼を回復する道であるといえます。しかし、実施計画を策定することなく、国は報告を受けてから1年間も等閑にしています。この遅々として進まない現状を、多くの人に知ってもらい、そして福島からのメッセージを随時伝えていきたいと考えています。

国による福島ふるさと復活プロジェクト「子どもの元気復活」計画が進められています。子どもたちの元気を取り戻すために、運動や遊びの場を開放していくというものです。しかし、安全に対する不安を払しょくできない父母が自ら動いて、子どもが遊ぶ公園やグラウンドなどを独自に測定し、高線量の場所には子どもが近づかないよう働きかける活動をされているところもあります。

JIM-NETでは今年度、子どもたちのための放射能の見える化プロジェクトを行ないます。エルノブイリ被害の追跡調査・報告で知られているアレクセイ・ヤプロコフ博士が先ごろ来日した際に、日本の子どもたちへ送ったメッセージは、このプロジェクトを実施する意義を明らかにしました。「今の私たちが理解しなければいけないのは、目にみえない敵と戦う手段をもっているということである。だから、もっと積極的に知識を身につけよう」

子どもたちのための放射能の見える化プロジェクトでは、知ることの大切さ、への理解を深めてもらう機会をつくっていきたいと考えています。

鎌田代表のつぶやき。。。
～人のつながり、って不思議なもんだ～

9年前にJIM-NETが作られたとき、イラクの子どもたちの救援をするためにヨルダンでイラク人ドクターたちと会議をおこないました。そのとき通訳にきてくれたのが、シーファーさん。その方の旦那さんは外交官で、数年前から日本大使となって日本にやってきました。シーファーさんのご両親には何度もお宅に呼ばれ、おいしい手料理をご馳走になりました。そのシーファーさんが、たくさんのアラブ諸国の大使夫人を招待して、ぼくのミニ講演会をしてくれました。それがきっかけで、イラクやアラブの大使夫人たちがおこなったバザーの収益金は、福島県南相馬のきっずサポート「かのん」という知的障がいの子どもたちの放課後等ディケア施設と、福島の子どもたちの体内被曝の測定や甲状腺検診を無料でおこなっているひらた中央病院、そしてJIM-NETの難民支援に寄付をしてくれることになりました。ありがとうございます。

さらにイラク大使夫人のラミース・フェリーさんのご厚意で、JIM-NETに15万円のご寄付をいただきました。イラクの子どもたちへと日本で大使館がいただいた千羽鶴をイラクの病気の子どもたちに届けて欲しい、という仕事も委託されました。



写真：（中央）イラク前大使夫人
（左）JIM-NETスタッフ太嶋（右）同齊藤

たくさんの人たちがこうやって仲良くなっていくことによって理解し合い、宗教や文化の違いがあつても友だちになれる。これが戦争をおこさないための最も大事な抑止力だと思います。軍隊を作ることや原爆を作ることでなく、たくさんの友だちをもつこと、それが本当の抑止力なのです。ひらた中央病院では秋から日本で初めて、4歳以下の子どもたちの体内被曝が測定できるホールボディカウンターの改良をおこないます。現在は2台の体内被曝の測定器がフルに動いて、検診を全員無料で行なっています。

【ひらた中央病院のご紹介】

<http://www.youtube.com/watch?v=rGkyME5wfCQ>

この度のアラブ大使夫人たちの応援、ほんとうに
ありがとうございます。心から感謝します。



第15回アラブチャリティーバザー 寄附金贈呈式（オマーン大使館にて）

「放射能の見える化」「検診」「保養」この3つが福島の子どもたちを守るために大切な3本柱と考えてきました。

これからも皆さまのご支援を宜しくお願い致します。

「イラク 白血病と闘う子どもたち」絵画展が開催されました！

長野県諏訪湖湖畔にある原田泰治美術館で5月11日から30日までギャラリーさざなみ特別展「イラク白血病と闘う子どもたち」が開催されました。

生まれた時から戦争と隣り合わせで育った子供たちが描いた絵画を 平和な日本で育った子どもたちが見たらどの様に感じたか知りたいと思っておりました。絵画展の終盤に美術館の学芸員の方から、「近頃、学校でのご来館が多いのですが、小学生、中学生のみなさんが熱心にご覧になっている姿に、感動しております。大人が感じている以上に子どもたちに「届いているな」という感じです。」と嬉し

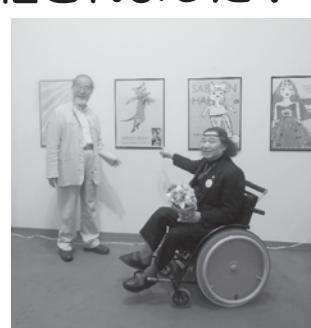


編集後記の場所が
なくなるほど話題
一杯の J I M N E T
今年度もよろしく
お願ひ致します・・。

い連絡を頂きました

立派な美術館でプロの方が展示した絵画展。

遠いイラクで一生懸命絵を描いた子供たちも喜んでいると思います。これからもどんどんいい展示会を企画していきたいと思います。



写真：原田画伯（右）と鎌田實
JIM-NET代表（左）

JIM-NET便り 2013年 6月号

発行: 特定非営利活動法人

元育：肯定介護活動法人
日本イラク医療支援ネットワーク

日本トヨタ 医療機器
発行日：2013年6月30日

元内旨

東京都豊島区高田3-10-24 第二大島ビル303

東京都豊島区高田3-18-24 第二大富ビル 303
info-jim@jim-net.net 03-6228-0746